

# 大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題

## — スキルの向上から資質の昂揚に向けて —

杉野 竜美<sup>1</sup>, 武 寛子<sup>2</sup>, 正楽 藍<sup>3</sup>

<sup>1</sup>神戸大学 大学教育推進機構, <sup>2</sup>愛知教育大学 教員養成開発連携センター,

<sup>3</sup>神戸大学 国際人間科学部

Student views of study abroad and international exchange programs:

Toward program improvement

Tatsumi Sugino<sup>1</sup>, Hiroko Take<sup>2</sup>, Ai Shoraku<sup>3</sup>

<sup>1</sup>Institute for Promotion of Higher Education, Kobe University,

<sup>2</sup>Center for Cooperative Teacher Training Development, Aichi University of Education,

<sup>3</sup>Faculty of Global Human Sciences, Kobe University

### 要 旨

近年、大学の国際化は高等教育の主要なテーマの一つであり、大学生の海外留学や国際交流活動の実態を明らかにすることは、喫緊の課題と言える。本稿では、日本の大学生へのアンケート調査における「学生が考える、留学者に対する企業の評価」と「国際交流活動」に関する回答結果から、大学が提供するグローバルな課題を扱う教育の在り方について検討する。

「学生が、企業人事担当者から在学中の海外留学経験をどのように評価されると思うか」の回答を軸として、「留学や国際交流に関するプログラムの参加状況、そこで得た能力」「外国語を用いて教科を教える授業に関する満足度」について分析した結果、「交流」「スキル」「資質」獲得への期待が読み取れる。外国語運用能力と異文化理解力の向上は不可欠な要素であり、多くの大学で取り組まれているが、課題を挙げるならば、さまざまな期待をもつ学生の参加を促すプログラムの展開を検討すべきだろう。また、諸活動の中で主体性、チャレンジ精神、積極性、柔軟性といった「資質」を伸ばすようなプログラム内容とその評価に重点を置くことが望まれる。

キーワード 大学の国際化、海外留学、学生の視点、留学志向

### はじめに

大学が学生の海外留学や国際交流活動を支援する背景には、世界経済および社会のグ

ローバル化への対応という大学の国際化と、日本の産業界から要請されるグローバル人材育成の2つの側面がある。筆者は、これまでに日本の4年制以上の大学に設置されている国際交流を目的とする部局へのアンケート調査、およびインタビュー調査を実施し、大学が海外留学送り出し支援や国際交流活動を目的とする全学組織を設置し、キャリア支援に関連するさまざまなプログラムを実施している現状を明らかにしてきた(杉野・正楽・武 2016; 正楽・杉野・武 2017)。そこで、本稿では、研究の焦点を学生に移して海外留学を含めた国際交流活動について検討する。これらの活動に学生たちがどの程度参加し、満足感を得ているのだろうか。本稿では、学生へのアンケート調査における「学生が考える、留学者に対する企業の評価」と「国際交流活動」に関する調査結果から、大学が提供するグローバルな課題を扱う教育について検討する。

本稿は、次のように構成される。第2節では、大学生の留学志向(海外留学についてどのように考えているか)と留学への動機付けに関する先行研究を概観し、本稿が日本人学生の海外留学をはじめとする国際交流活動への参加状況に着目する意義を提示する。第3節では、筆者による「大学の国際化と学生生活に関する調査」の概要を述べ、第4節では、本調査の結果を分析する。最終の第5節では、調査結果の分析をもとに、日本人学生による海外留学や国際交流プログラムで獲得する能力観(海外留学による自身の能力獲得に対する評価)を把握し、さらに、彼らの能力観に照らした教育の課題について考察する。

## 先行研究

河合(2009)は留学志向に関する日本人学生へのインタビュー調査を通じて、留学に対する明確な動機を学生にもたせるために、外国人留学生と日本人学生とが交流する機会を充実させたり、留学が卒業の必要要件になるように制度化されたりするなど、学修環境を整備、強化することの重要性に言及している。岩城・野水(2010)による調査においては、学生の多くが留学に興味を示している一方で、就職活動の開始時期が遅れること、経済的な負担が大きいことが理由で留学をあきらめる傾向にあることが指摘されている。また、杉野・武・正楽(2014)による、学生数や立地環境などが異なる2つの国立大学間で分析した先行研究では、次のことが明らかにされている。(1) 留学志向の度合いに関係なく、学生は、留学は将来の職業に役立つと考えており、この結果には大学間における相違はない。(2) これまでの海外渡航経験の有無と留学志向の関連性は低く、この結果にも大学間における相違はない。(3) 両大学において海外留学をするうえで学生が問題として挙げるのは、留学費用と語学力である。(4) 両大学における語学力に関する学生の自己評価は、読む力に対しては高い評価をする一方で、話す力に対しては低い評価をしている。(5) 両大学とも、学生が大学に期待する留学促進制度は、奨学金制度、協定校以外の大学に留学した場合の単位認定制度、外国人留学生との交流の機会の充実、である。この結果

の中でも、とりわけ留学志向の高低にかかわらず、学生は、留学が将来の職業に関連すると考えている点に、大学としてどのような教育支援を提供すべきかに対する重要な示唆を得ることができる。大学は、学生が何を学び、何ができるようになるべきかという、いわゆる教育の質を保証し、学修成果を提示することが求められている近年において、留学を通じて学生は何を獲得することができ、どのような就職先（出口）があるのかを提示することは、大学教育の国際化を推進するうえで極めて重要な課題だと言えよう。

留学への動機づけとして、大学における外国人留学生との交流や接点の有無が、留学志向と関係する（河合（前掲））。池田（2011）も外国人留学生との交流が、日本人学生が海外に目を向ける契機となることから、このような機会を大学が積極的に提供することを提案している。隈本（2014）は、留学への動機づけとなる背景の一つとして、留学を勧める教員や留学経験をもつ友人の存在を指摘する。このことから、すでに海外に留学した日本人学生など、大学における貴重な人材を活用することによって、留学志向を高める契機になると考えられる。

このように、就職が将来の職業に関連すると考えていることが明らかにされ、また、外国人留学生と交流することが、日本人学生の留学志向を高めることにもつながることが指摘された。しかし、留学によって身につくどのようなスキルや知識が就職活動において評価されると考えているのかは明らかにされていない。また、大学が提供している外国人留学生との交流の機会等に対して、学生はどの程度その機会を利用しており、どのように考えているのかについても実状が把握されていない。そこで本稿では、この2点に着目して、学生に対して実施した留学志向と大学生活に関する調査の結果を検討する。

## 調査概要

アンケート調査は、2015年7月から2016年3月、全国の4年制以上の大学に在籍する大学生を対象に、紙媒体とウェブ媒体のアンケート調査票を用いて実施し、910名の有効回答を得た。

回答者の所属する大学を設置区分別に見ると、国立大学595名、公立大学138名、私立大学177名である。所在地域別では、関東①（茨城県、千葉県）1名、関東②（東京）30名、関東③（神奈川県）および中部391名、近畿375名、中国・四国63名、九州・沖縄50名である。大学の分類で見ると、総合大学521名、非総合大学282名である。

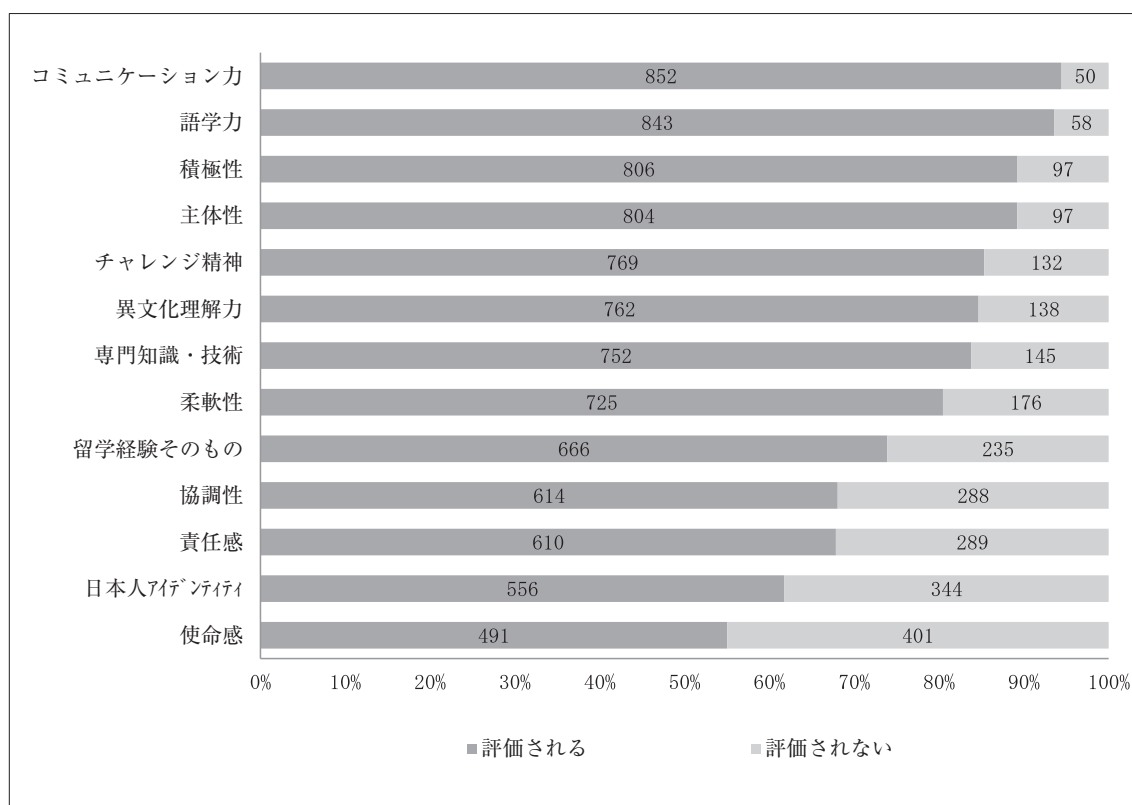
回答者の性別は、男性414名（45.5%）、女性495名（54.4%）、不明1名であり、女性の方が若干多いとはいうものの、ほぼ同等と言える。学年は、1年生197名（21.6%）、2年生484名（53.2%）、3年生164名（18.0%）、4年生50名（5.5%）、不明15名である。

## 大学生の海外留学と国際交流の状況

### 1. 学生が考える、留学経験者に対する企業の評価

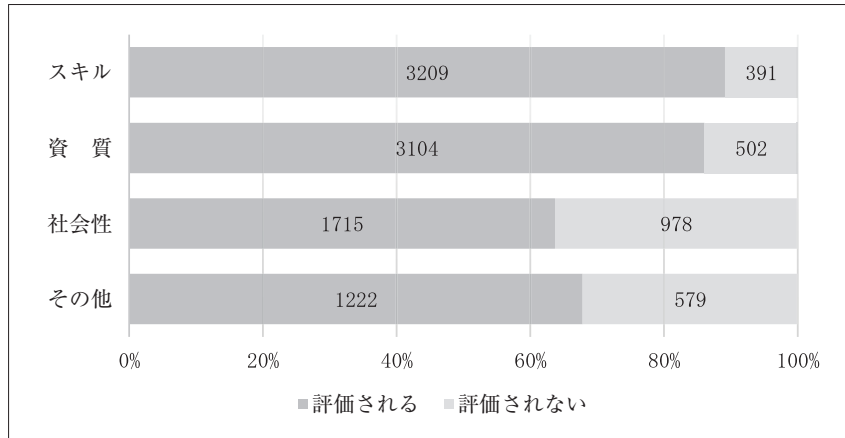
学生が、留学と将来の職業やキャリアパスを関連付けていることは先行研究で確認したとおりである。そこで、就職活動の場面を想定し、留学と将来の職業について、どのように関連付けているのかについて調査した。アンケートでは、「大学生が就職活動をする際、海外留学の経験は企業の人事担当者からどのように評価されると思いますか?」という問いに13項目の回答を提示し、それぞれの項目に対して「思う」「どちらかと言えば思う」「どちらかと言えば思わない」「思わない」のいずれかにチェックを入れる形式をとった。その集計にあたって、「思う」「どちらかと言えば思う」を合わせて『(就職活動時に)評価される』とし、「どちらかと言えば思わない」「思わない」を合わせて『評価されない』とした2つのカテゴリーに分けて示したのが図1である。これによると学生は、コミュニケーション力や語学力といったスキルに関する能力が、企業の人事担当者に評価されると考えている。

図1. 学生が考える企業人事担当者の留学者への評価①



出典) 筆者

図2. 学生が考える企業人事担当者の留学生への評価②



出典) 筆者

さらに、この特徴を把握するために、類似した項目を集め、4つのグループに分類した。

スキル：語学力、コミュニケーション力、異文化理解力、専門知識・技術

資質：主体性、チャレンジ精神、積極性、柔軟性

社会性：使命感、協調性、責任感

その他：日本人アイデンティティ、留学そのもの

「スキル」は、「～力」と表現できるもので、練習や努力によって獲得できる能力を指す。「資質」は、他者や課題に向けて働きかける際に必要な素養を集めた。「社会性」は、(特に)日本社会で要求されると考えられるものを集めた。「その他」は、上記3グループに分類できない項目である。この4グループで見ると、スキルと資質が評価されると考える学生が多い(図2)。つまり、企業の人事担当者は、海外留学で獲得したスキルや資質を高く評価する、と多くの学生が考えている傾向がある。

では、企業がグローバル人材として求めるものは何だろうか。日本経済団体連合会(以後、経団連)の調査<sup>(1)</sup>では、各企業へ「グローバル事業で活躍する人材に求める資質・知識・能力」に関する質問に対して、①「海外との社会・文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する姿勢」という回答が最も多い。次に多いのは②「既成概念にとらわれず、チャレンジ精神を持ち続ける」、続いて③「英語をはじめ外国語によるコミュニケーション能力を有する」である。①②は資質、③はスキルに該当する。これを学生の考えと比較すると、スキルと資質が逆転している。たとえば、学生の考える留学生に対する企業の評価は「コミュニケーション力」「語学力」といったスキルが上位だが、実際の企業が求めているのは「異文化理解力」「主体性」「柔軟性」に対する姿勢といったスキルおよび資質が上位である。また、経団連の同調査における「産業界が卒業時に大学生が身につけていることを期待する素質・能力・知識」に関する質問に対して、「主体性」(資質)が1番に挙げられており、次に「コミュニケーション力」(スキル)と続いているが、学

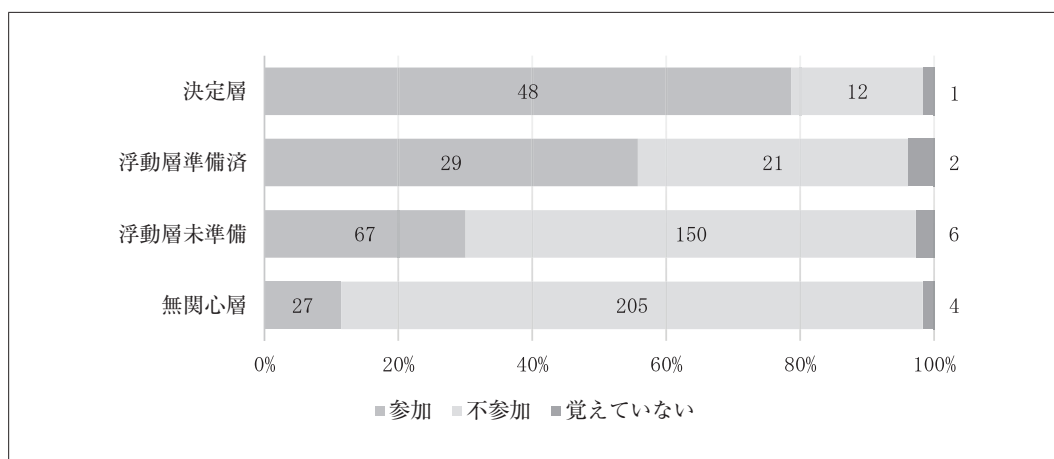
生は「コミュニケーション力」(スキル)が最も評価される項目と考えており、「主体性」に関しては4番目に上がった項目であった(図1)。学生はスキルが求められていると考えているが、企業は資質に期待しているのである。

企業が「卒業時に大学生が身につけていることを期待する素質・能力・知識」として挙げた項目は資質に関するものが多く、これらは客観的にも主観的にも計測が困難なものである。これらをいかに獲得・内面化し、それをどのように表現することができるかは今後の課題である。

## 2. 国際交流活動

次に、学生の所属する大学での国際交流活動参加状況と満足度を分析した。大学での国際交流活動とは、大学(学生や教職員)が実施する外国人留学生との交流会などの異文化理解や国際理解のために開催されている授業以外の活動を指す。まず、学生の留学志向を把握するために、本調査では全学生を次の4つに分類した。①留学が決定している「決定層」、②留学を希望しており準備をしている「浮動層準備済」、③留学を希望しているが特に準備をしていない「浮動層未準備」、④留学には関心がない「無関心層」、である。この分類別に見た国際交流活動参加状況は図3のとおりである。留学志向の高いほど、大学の国際交流活動への参加率が高いことが分かる( $r=.424$ )。

図3. 大学の国際交流活動への参加状況

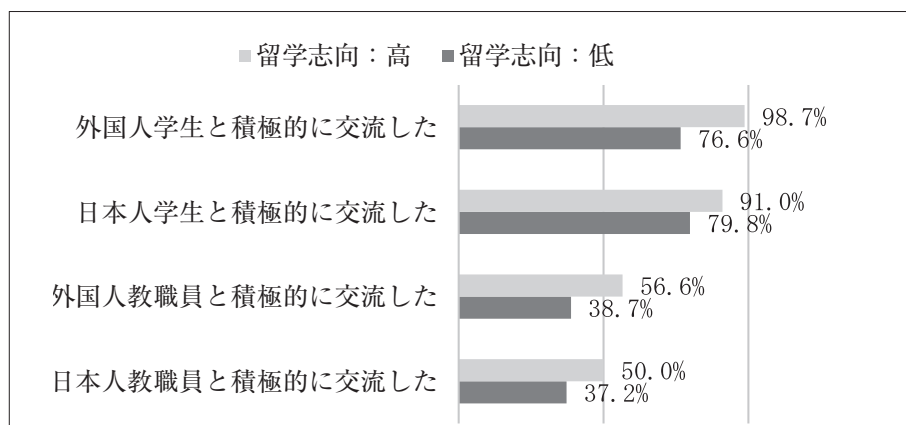


出典) 筆者

$r=.424^{**}$

次に、国際交流活動に参加した学生が、「どのような交流があり、どのような能力を獲得したか」という自己認識を分析した。前述の「決定層」「浮動層準備済」を合わせて「留学志向：高」とし、「浮動層未準備」「無関心層」を合わせて「留学志向：低」としてまとめ、留学志向の高いグループと低いグループに分類し、国際交流活動に参加して経験した交流について尋ねた結果が図4である。

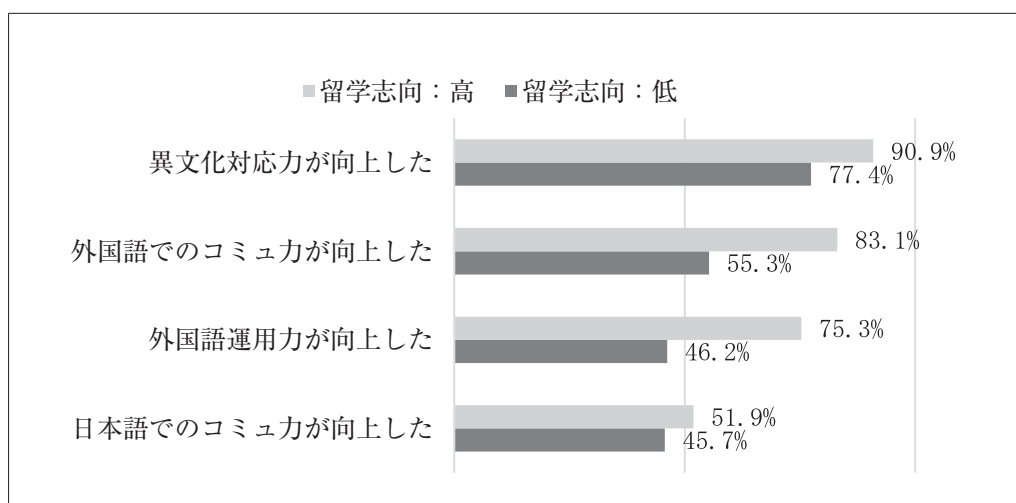
図 4. 国際交流活動における経験：交流



出典) 筆者

留学志向の高いグループでは「外国人学生と積極的に交流した」の回答が最も高い割合（98.7%）を示しているのと比較すると、留学志向の低いグループの同割合は低い（76.6%）。留学志向の低いグループに焦点を当てると、「日本人学生と積極的に交流した」と回答した割合（79.8%）が最も多い。図5は、学生が国際交流活動を通して獲得したと自己認識しているスキルである。留学志向の高低にかかわらず、①異文化対応力、②外国語でのコミュニケーション力、③外国語運用力、④日本語でのコミュニケーション力、という順位でこれらの能力が向上したと自己認識している。

図 5. 国際交流活動における経験：スキルの向上



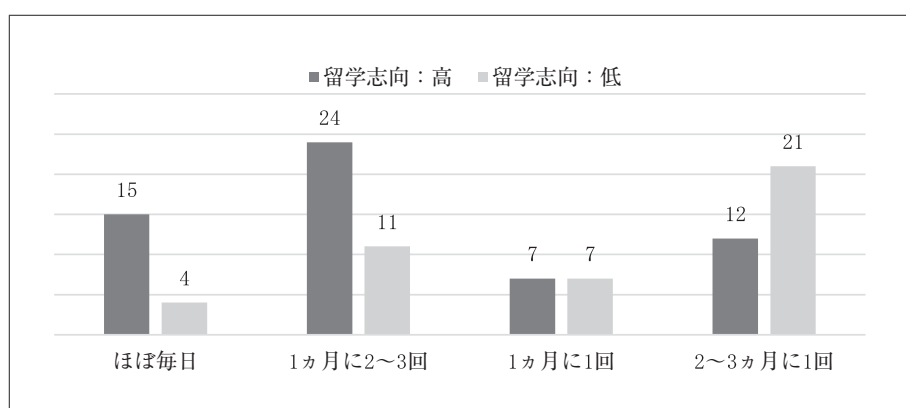
出典) 筆者

図4と図5から分かることは、国際交流活動に参加することで向上したと学生が自己認識している能力は、留学志向の高いグループと低いグループで差異は見られないが、交流

した対象は異なっていることである。このことから、留学志向の高低によって、国際交流活動への参加の意味付けが異なることが推察される。つまり、留学志向の高いグループにとって国際交流活動は、外国人学生との交流のほか、異文化対応力や外国語でのコミュニケーション力、外国語運用力といった国際社会で通用する能力の向上という意味で重要であるのに対して、留学志向の低いグループにとって国際交流活動は、日本人学生や外国人学生との交流、異文化対応力の向上といった交流全般を重要視している傾向が見られる。留学志向によって、国際交流活動から得られると考えているスキルが異なる。大学は、国際交流活動の重層的な意味合いを考慮する必要があると言えるだろう。

国際交流に関しては、大学（学生や教職員）が実施する外国人留学生との交流会などの異文化理解や国際理解のための活動だけでなく、イングリッシュ・カフェやグローバル・ラウンジなどの名称が付けられている国際交流スペースも重要な空間である。この国際交流スペースの利用状況と利用目的について分析した。大学に国際交流スペースが「ある」と回答した378名のうち<sup>(2)</sup>、国際交流スペースを利用した学生は174名である。その利用頻度は、「ほぼ毎日」19名、「1ヵ月に2～3回程度」35名、「1ヵ月に1回程度」14名、「2～3ヵ月に1回程度」33名である。この利用頻度を留学志向との関連で表したのが図6である。全体としては、「1ヵ月に2～3回程度」「2～3ヵ月に1回程度」の利用が多いが、留学志向別に見ると、留学志向の高いグループでは利用頻度は高く、留学志向の低いグループでは利用頻度がやや低いと言える。ただし、留学志向の低い学生の中には1か月に2～3回利用している者（11名）やほぼ毎日利用している者（4名）がおり、必ずしも留学志向の低い学生が国際交流に関心が低いとは言えないことが分かる。

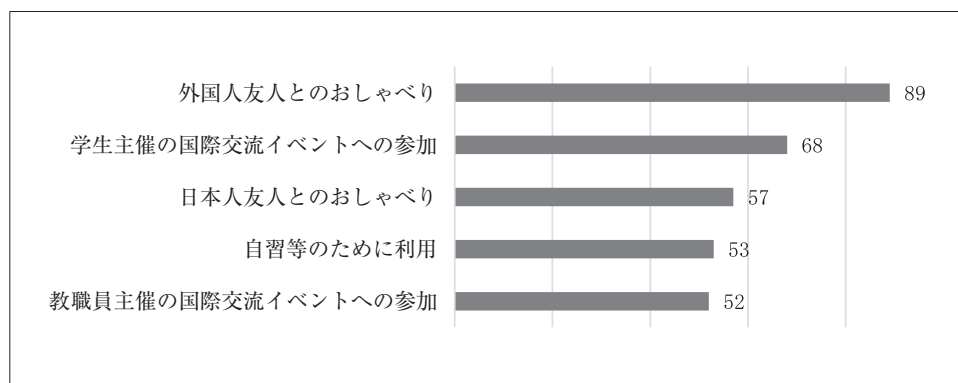
図 6. 留学志向別、国際交流スペースの利用頻度



出典) 筆者



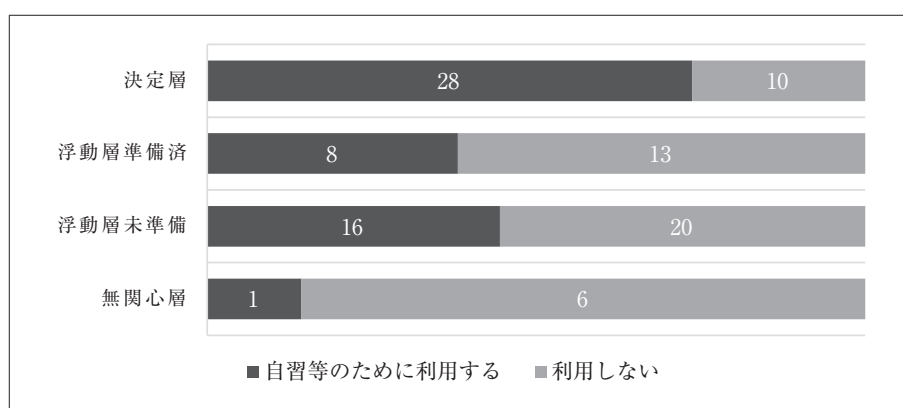
図 7. 国際交流スペースの利用目的



出典) 筆者

国際交流スペースの利用目的については、「外国人の友人とおしゃべりをするため」(89名)が最も多い(図7)。利用目的のいずれにおいても、留学志向による回答の違いは見られない。ただ、国際交流スペースを「自習等のために利用する」の回答に限っては、留学志向別で回答の違いが確認できる( $r=.297$ ) (図8)。決定層では、国際交流スペースを自習等のために利用している学生が28名であるのに対して、無関心層では1名のみであった。国際交流スペースは、その目的の通り国際交流のために利用している学生が多い。加えて、決定層をはじめ、浮動層(準備済、未準備とも)の学生は、国際交流以外の目的であってもこのスペースを利用している。上記の利用頻度と重ねて検討すると、無関心層以外の学生にとって、国際交流スペースが身近な場となっていることが伺える。

図 8. 留学志向別に見た自習等のために利用する学生数



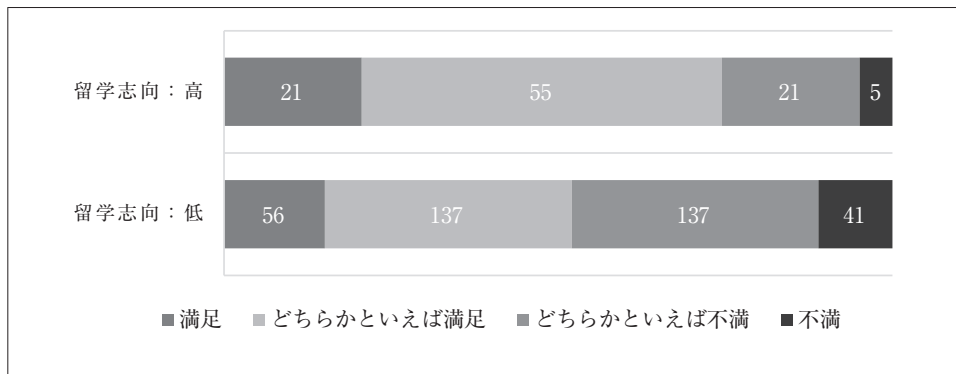
出典) 筆者

$r=.297^{**}$

### 3. 外国語による授業

外国語による授業<sup>(3)</sup>に関する満足・不満感、その理由から授業における国際交流について分析する。

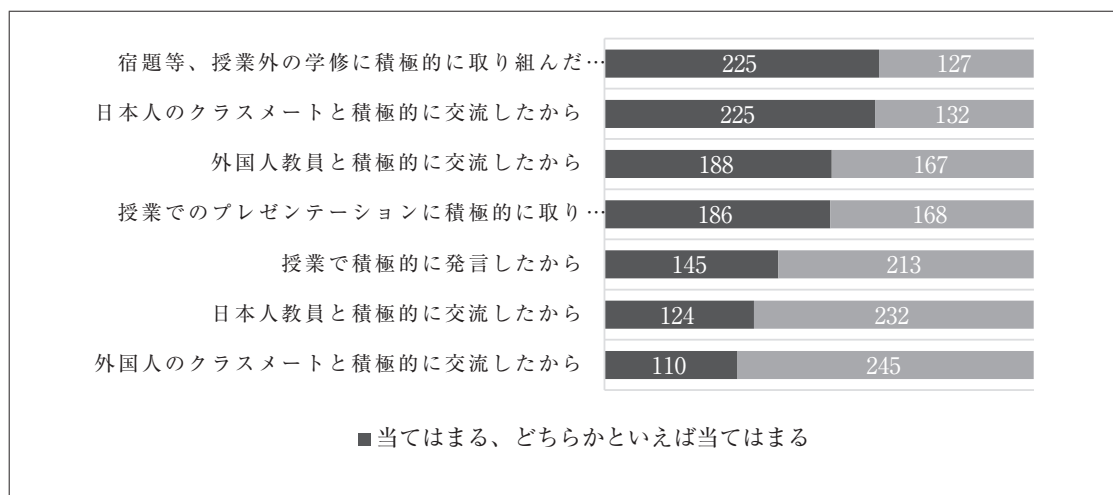
図 9. 留学志向別、外国語による授業の満足・不満感



出典) 筆者

外国語による授業を受講したことがある学生480名の満足度について留学志向別に示したのが図9である。留学志向の高いグループでは「満足」「どちらかといえば満足」と回答している割合が高い。留学志向の低いグループでは、「満足」「どちらかといえば満足」と回答した学生と「不満」「どちらかといえば不満」と回答した学生の割合はほぼ同等である。外国語による授業に満足な理由は、「宿題など、授業外の学修に積極的に取り組んだから」が最も多く、「外国人のクラスメートと積極的に交流したから」を理由と考えている学生は少なかった(図10)。むしろ、「日本人のクラスメートと積極的に交流したから」と回答する学生が多かった。

図 10. 外国語による授業に「満足」「どちらかといえば満足」な理由



出典) 筆者

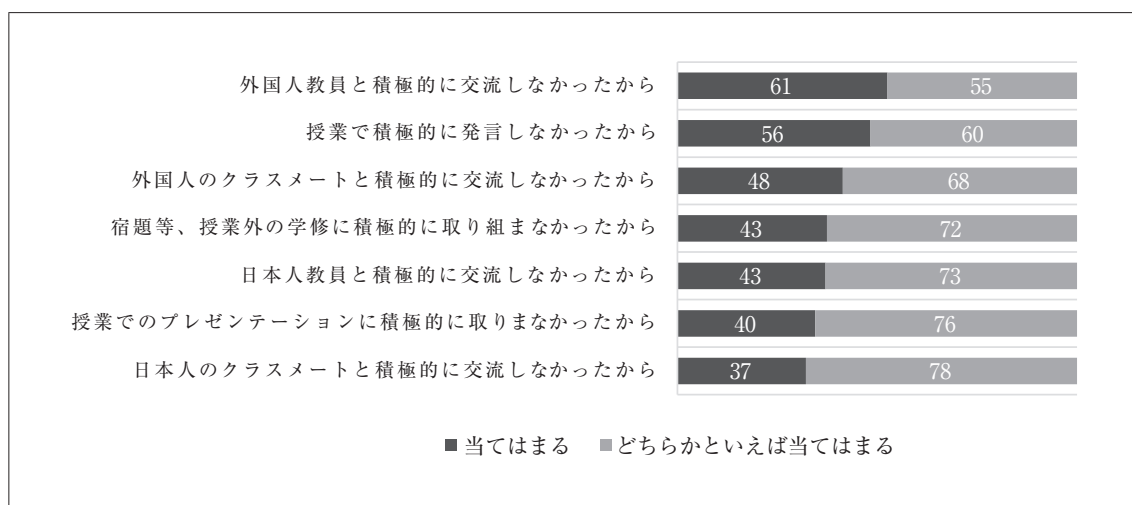
外国語による授業に対して不満な理由は、「外国人教員と積極的に交流しなかったから」が多く、「日本人のクラスメートと積極的に交流しなかったから」という回答が少なかった。

た。上記の満足な理由と照らし合わせると、外国語による授業で日本人のクラスメートと交流することは充実していると考えられる。逆に、外国人の教員やクラスメートとの交流において課題があると言えるだろう。「外国人のクラスメートとの積極的な交流」について、「満足」「どちらかといえば満足」と回答した学生数が少なく、「不満」「どちらかといえば不満」と回答した学生が多い。これは、外国語による授業において、外国人クラスメートとの積極的な交流は活発ではないが、それを期待していると解釈できる。

「授業での積極的な発言」についても同様に、「満足」「どちらかといえば満足」と回答した学生数がやや少なく、「不満」「どちらかといえば不満」と回答した学生が多い。学生は授業中の発言は活発ではないが、その機会を期待している。

外国語による授業に対する不満な理由を見ると、「外国人クラスメートとの積極的な交流」と「授業での積極的な発言の機会」に期待していると言える。外国語による授業に関する調査においても、コミュニケーション力を要する交流といった「スキル」への期待が見られる。

図 11. 外国語による授業に「不満」「どちらかといえば不満」な理由



出典) 筆者

## おわりに

今回我々が実施した、学生の考える留学者に対する企業の評価に関する調査では、第一に「スキル」が重要視されており、次に「資質」が続くことが分かった。その一方で、企業の求めるグローバル人材では、主体性などの「資質」が最も期待されており、次に「スキル」が求められている。また、大学の国際交流活動に関する学生の捉え方を検討すると、留学志向の高いグループを中心に、異文化理解力やコミュニケーション力といった「スキル」の向上を実感していることが確認できた。

これを踏まえて大学が提供するグローバルな課題を扱う教育の在り方について、企業の

求めるグローバル人材に鑑みて検討すると、学生が「スキル」を重要視していることが分かった。また、大学の国際交流活動において、主に「スキル」の点で学生が満足していることが分かった。さらに、外国語による授業に関する調査でも、コミュニケーション力などの「スキル」の面への期待が見られた。

このように大学の国際交流プログラムでは、学生にとって「スキル」面で充実している。更なる国際交流プログラムの発展のために、大学では「資質」の重要性の認識、およびその向上を取り入れることが更なる重点課題と言える。主体性、チャレンジ精神、積極性、柔軟性などの「資質」を伸ばすプログラムを開発し、それらの評価に重点を置くことが望まれる。

## 文末注

- (1) 経団連が実施したアンケート調査は、①事業活動のグローバル化をふまえた産業界の人材ニーズと求める人材の具体像、企業の人材育成への取り組み、②人材育成において産業界が教育機関に期待する取り組み、③人材育成に向けた企業と大学の連携、経団連への要望、を調査している。実施期間は2014年11月25日～2015年2月6日、経団連会員企業・非会員企業463社の回答を集計・分析している。
- (2) 「大学に国際交流スペースがありますか？」の質問に対する回答は次のとおりであった。「はい」378名、「いいえ」88名、「分からない」424名、欠損値20。
- (3) 外国語による授業とは、外国語を教授言語とした一般教育科目、基礎教育科目、専門科目などの授業を指す。外国語を教える外国語科目を除く。日本の大学での外国語による授業とは多くの場合、英語による授業を指し、これは、教育、その他の業務において英語を主要言語としない状況のなかで、英語を教授言語とする教育システムのことである (Rose and McKinley 2017)。

## 参考文献

- 堀田泰司. 2010.「日本人のアメリカ留学離れと21世紀型アジア教育交流の可能性」『留学交流』7月号: 2 - 5.
- 池田庸子. 2011.「海外留学の意義とメリットを考える—海外留学によって何が得られるか—」『留学交流』7月号: 1 - 10.
- 岩城奈巳・野水勉. 2010.「名古屋大学生と海外留学—全学教養科目「現代世界と学生生活」課題レポートから見えてきたもの—」『名古屋大学留学生センター紀要』8: 17 - 22.
- 河合淳子. 2009.「海外留学の動機と制度的制約—日本人学生対象アンケート・インタビューの考察」京都大学国際交流センターアンケート調査班『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起: 第3回アンケート・インタビュー調査報告書』京都大学国際交流センター: 105 - 120.

- 隈本・ヒーリー, 順子. 2014.「日本人学生の海外留学動機づけに関する要因」『大分大学国際教育研究センター年報』.
- (一般社団法人) 日本経済団体連合会. 2015.『グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート結果』
- [https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028\\_honbun.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028_honbun.pdf)(最終閲覧: 2017年1月9日)
- 佐藤由利子. 2010.『日本の留学生政策の評価—人材養成、友好促進、経済効果の視点から』東信堂.
- 正楽藍・杉野竜美・武寛子. 2017. 「大学の国際化と海外留学支援制度—留学促進に向けた教育体制構築の必要性—」『大学教育研究』第25号: 103 - 119.
- 杉野竜美・正楽藍・武寛子. 2016.「キャリア形成の視点から見る大学生の海外留学支援体制」『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』山内乾史・武寛子(編),学文社.
- 杉野竜美・武寛子・正楽藍. 2014.「大学生のキャリア展望をもとにした海外留学支援制度の在り方—日本の四年制大学におけるインタビュー調査より—」『国際協力論集』第21巻第2&3号合併版: 121 - 140.
- Rose, Health and McKinley, Jim. 2017. Japan's English-medium instruction initiatives and the globalization of higher education. Higher Education, Vol.73, <http://link.springer.com/article/10.1007/s10734-017-0125-1> (最終閲覧: 2017年3月28日)